

混合木蠟二塩基酸の融點について

権 名 七 郎

著者（高松高等商業學校、紀元二千六百年）は木蠟脂肪酸より、二鹽基酸 $\text{HO}_2\text{C}\cdot(\text{CH}_2)_{20}\cdot\text{CO}_2\text{H}$ を分離するに
 記念論文集 昭和十五年 三六八頁

當り、融點四九度（攝氏）の脂肪酸のエチル・エステルを結晶を得た。この結晶は再結晶を繰り返すも、その融點を殆んど變化せず、純粹品の如き感があるが、熔融狀態より凝固する時の模様その他より、單一物質とは考えられず、 $\text{HO}_2\text{C}\cdot(\text{CH}_2)_{20}\cdot\text{CO}_2\text{H}$ 及 $\text{HO}_2\text{C}\cdot(\text{CH}_2)_{18}\cdot\text{CO}_2\text{H}$ より成る混合二鹽基酸のエチル・エステルであると報告しておいた。

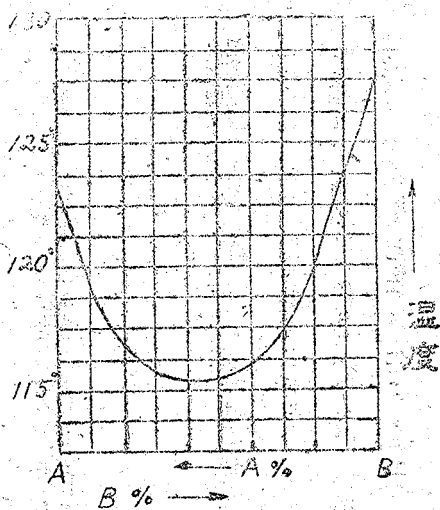
右混合二鹽基酸のエチル・エステルは鹼化の後、酸で分解すると、融點一一五—一二六度の脂肪酸になる。この脂肪酸も亦、再結晶により融點を殆んど變化せず、そのメチル・エステルを真空蒸溜に附するも、成分に變化を認められず、クロマトグラフ法を試みたが、二成分の分離に成功しなかつた。然し著者はその試料が二成分より成ることを飽く迄信ずるものであり、その證明の一材料として、 $\text{HO}_2\text{C}\cdot(\text{CH}_2)_{20}\cdot\text{CO}_2\text{H}$ 及 $\text{HO}_2\text{C}\cdot(\text{CH}_2)_{18}\cdot\text{CO}_2\text{H}$ との種々の割合の混合物を作り、その融點を測定して見た。その結果は高松經專論叢原稿とし、編輯者へ頼んでおいたが、空襲のため焼失し、著者自身も亦罹災じ、一切の報告材料を失つたこと、残念とする所である。

る。正確を期することは到底出来ないことであるが、今記憶に残る曲線の大體の形を書き、第一及第二圖として掲載のこととした。

右二種の二鹽基酸を混合する時は、融點一二五——一二七度のものが容易に出来、この混合物と融點一二五——一六度の試料との混融試験結果は、融點降下を示さず、兩者の成分量が大体等しいものと見るべきである。

第一圖に於て、A は $\text{HO}_2\text{C} \cdot (\text{CH}_2)_{18} \cdot \text{CO}_2\text{H}$ (融點一二三・八一——一二四・二度)、B は $\text{HO}_2\text{C} \cdot (\text{CH}_2)_{20} \cdot \text{CO}_2\text{H}$ (融點一二六・九——一二七・一度) を示し、第二圖に於て A は $\text{H}_5\text{C}_2\text{O}_2\text{C} \cdot (\text{CH}_2)_{18} \text{CO}_2\text{C}_2\text{H}_5$ (融點五四・六——五四・八度)、B は $\text{H}_5\text{C}_2\text{O}_2\text{C} \cdot (\text{CH}_2)_{20} \text{CO}_2\text{C}_2\text{H}_5$ (融點六一・〇——六一・一度) を示す。

第一圖



第二圖

